

# 複合動詞の構造分析に関する一考察 一前・後項動詞とも単独用法での意味・機能を保っている組み合わせを中心に

安 善柱

## 1 はじめに

二つの動詞から成る組み合わせの中には、動詞形と名詞形を共に持つ類<sup>1</sup>、名詞形しか持たない類<sup>2</sup>、そして動詞形しか持たない類<sup>3</sup>がある。ここでは、動詞形と名詞形を共に持つ類の動詞形を複合動詞<sup>4</sup>、名詞形を転成名詞と呼び、名詞形しか持たない類の名詞形を複合名詞<sup>5</sup>と呼ぶことにするが、複合名詞の組み合わせでは動詞形が成り立たないことから、複合名詞は複合動詞の構造を明らかにするのにかなり役立つと思われる。

本稿では、複合動詞と複合名詞を、それぞれを構成している二つの動詞間の意味関係に基づいて幾つかの構造に分類し、複合動詞と複合名詞を比べることで、複合動詞の構造上の特徴を調べることが目的である。これは、複合動詞として成立可能な組み合わせの弁別にもつながることである。

## 2 先行研究

石井 (1984) では、複合名詞との比較を通じて複合動詞の成立条件を考察している<sup>6</sup>。氏は複合動詞の成立条件 (必要条件) として、

<sup>1</sup> 「積み重ねる、積み重ね」類の組み合わせ。

<sup>2</sup> 「立ち読み、\*立ち読む」類の組み合わせ。

<sup>3</sup> 「焼け死ぬ、\*焼け死に」類の組み合わせ。

<sup>4</sup> 本稿では、前項要素と後項要素が共に元々の意味・機能を保ち続けている「動詞の連用形+動詞」の組み合わせだけを対象とし、「うち重なる、しゃべりまくる、取り組む」等は対象外とすることにする。なお、二つの動詞から成る組み合わせの動詞形が名詞形を持つか持たないかは、単純語の動詞の名詞化の問題と同様に扱うことができるとの指摘もあり (石井 1984)、ここでは動詞形しか持たない類の動詞形も複合動詞に入れることにする。

<sup>5</sup> 前・後項要素が共に元々の意味・機能を保ち続けている「動詞の連用形+動詞の連用形」の中で、動詞形の存在しない名詞形だけの組み合わせを複合名詞と呼ぶことにする。ここには「立ち読み、生き埋め」等が入るが、「忌み明け、ちらし配り」のように前項要素がもはや名詞化したものは除くことにする。

<sup>6</sup> 但し、石井の複合名詞・複合動詞は、前・後項要素の一方または両方が単独用法での意味・機能を失っている組み合わせも対象にしている。

- ・前項要素は主体の<動作>を表わすことのできる動詞<sup>7</sup>で、後項要素は主体あるいは客体の<変化>を表わすことのできる動詞<sup>8</sup>であること
- ・構成要素の語彙的な意味のむすびつきが「実現・結果性」<sup>9</sup>、及び「過程性」<sup>10</sup>をつくりあげていること

を挙げている。

反面、複合名詞は複合動詞の一番目の条件を満たさない場合が多く、二番目の両方または片方の条件が欠けていると指摘している。「立ち読み、立ち食い」等がその例である。

しかし、この説明なら「売り歩く、生き別れる、飲み明かす」等の組み合わせは複合名詞に入ることになる。多くの複合動詞が上の条件を必要とするとしても、この条件が合わない複合動詞もまたかなり存在するのである。

一方、嶋田(1989)では、複合名詞<sup>11</sup>と複合動詞との相違を、複合語の表わす全体的な意味からみつけてだしている。つまり、複合名詞や複合動詞において意味を担う部分は、構成素としての二つの動詞と複合語全体の三箇所存在するとして、

- ・その意味が不透明なものと合成的かつ一体化したものは複合動詞になり<sup>12</sup>、
- ・その意味が特殊なものと合成的だが一体化していないものは複合名詞になる

<sup>13</sup>。

と指摘している。

嶋田は「飢え死に」を「狂い死に」と同様に、その意味が合成的だが一体化していないものに入れているが、「飢え死に」はその意味が合成的かつ一体化したものに思えてなら

<sup>7</sup>「読む、書く」等の絶対他動詞類。

<sup>8</sup>「折れる、壊れる」等の相対自動詞類(主体の変化)と、「折る、壊す」などの相対他動詞類(客体の変化)。

<sup>9</sup>例えば「(太郎が岩を)打ちくだく」は、「(太郎が岩を)打ち(岩が)くだける(太郎が)ようにする」を意味している、打ちとようにするは[実現]を、くだけるは[結果]を表わしているのである。

<sup>10</sup>この「過程性」とは、前・後項要素が時間的順序通りになっている事を指す。

<sup>11</sup>ここでは「スル」を付けて動詞の役割を果たすものだけを複合名詞の対象にしている。

<sup>12</sup>例えば、「切り倒す」は、「切り」の意味と「倒す」の意味が合わせられて「切り倒す」全体の意味を表わしているため、合成的な意味を持つと言える。一方、「引越す」の場合、全体の意味は「越す」に一致している。とはいえ「越す」には「引越す」にないもう一つの意味があるため、「引越す」の「引つ」は、本動詞の「越す」が持つ意味のうちの一つを選択する役割を果たしているわけである。しかし、この「引つ」は本動詞としての意味も強調の意味も持たず、「引越す」全体の意味には何の貢献もしていない。したがって、「引越す」は合成的な意味を持たないことになり、このような組み合わせは不透明な意味を持つこととする、と説明されている。

<sup>13</sup>例えば「切り売り」は、<買い手の求める分量だけ切って売ること>を意味しているが、ここで<買い手の求める分量だけ>は構成素である二つの動詞の意味からは合成できない特殊な意味であり、この類の組み合わせは特殊な意味を持っていると言ってよいであろう。一方、「狂い死に」は、「狂い」の意味と「死に」の意味が合成されているが、人が狂うことはその後でも生きていることが前提になるため、前・後項要素が一体化しているとは言えない。したがって、「狂い死に」は<死ぬときに狂っている>との解釈を持つことになる、と説明されている。

ない。そうすると「飢え死に」は複合動詞に入ることになるのである。また「上げ下げ、伸び縮み」等、前・後項要素が並列関係を持つ組み合わせは、動作の反復を含意しているため、意味が特殊なものとして複合名詞に入れているが、これでは「輝ききらめく、忌み嫌う」等の並列関係の複合動詞は説明できなくなる。このように、氏の<不透明、特殊、合成的、一体化>等についての説明には、かなり曖昧なところがあるため、複合動詞と複合名詞がごったになる場合がある。

本稿では複合動詞や複合名詞の条件を探ることに先立って、まず複合動詞の構造上の特徴を調べることにする。そのために、複合動詞・複合名詞それぞれを、前・後項要素の意味関係が似ている組み合わせ別にまとめてその特徴を調べる。その次に複合動詞グループと複合名詞グループとを比較し、複合動詞の特徴を引き出す。但し、動詞は絶対他動詞・絶対自動詞・相対他動詞・相対自動詞の四つに分ける footnote 絶対他動詞とは、形態的に対応する自動詞を持たない他動詞類を指す。「読む」「かぶる」等。絶対自動詞とは、形態的に対応する他動詞を持たない自動詞類を指す。「歩く」「死ぬ」等。相対他動詞とは、形態的に対応する自動詞を持っている他動詞類を指す。「固める」「壊す」等。相対自動詞とは、形態的に対応する他動詞を持っている自動詞類を指す。「固まる」「壊れる」等。ことを前提としておく。

### 3 複合動詞の分類

複合動詞の前・後項要素の意味関係は、すべてが同じであるわけではない。例えば、「洗い落とす」と「焼け死ぬ」における、前・後項要素の意味関係は異なっている。つまり、「洗い落とす」の前・後項要素は<手段－行為>の意味関係を表わしているが、「焼け死ぬ」の前・後項要素は<原因－結果>の関係になっているのである。他にも、「隠し持つ」「売り歩く」「乗り捨てる」「泣き叫ぶ」「食べ残す」等における前・後項要素は、<手段－行為>でも<原因－結果>でもない、さまざまな意味関係を持っている。

そこで複合動詞を、似た意味関係を持つと思われる組み合わせ別に七つに分類し、各構造の実例とその特徴を細かく調べてみることにする。以下、実例の後ろに付いている括弧内の、「数字」は日付、「朝」は朝日新聞、「CH 数字」「ドラマ」「映画」「漫画」等はテレビ放送であることを示す。

#### 3.1 『手段』構造

- (1) 液体入りの透明の袋を先のとがったドライバーで突き破るそぶりを… (95.6.30 朝)
- (2) 家々の低い塀はサンゴを積み重ねたものだ。(95.5.12 朝)

(3) カップを持ち上げた時、水分の落ちたどろどろの山に、… (95.5.4 朝)

前項要素が後項要素の<手段・方法>になると思われる構造で、[前項要素コトデ後項要素]に言い換えられる。他にも、「洗い落とす、握りつぶす、切り倒す」等の例があり、この構造が複合動詞の大多数を占めている。

動詞の形態からみると、大半の『手段』構造は「絶対他動詞+相対他動詞」型になっている。この組み合わせは、何かの手段で(絶対他動詞)、ある行動を取りその結果どうなったか(相対他動詞)<sup>14</sup>を、一遍に表わすのに都合のいい、効率的な表現方法である。

他の構造と弁別できる特徴として、この構造の組み合わせの前には<手段>の副詞相当語句～デが来られるということが挙げられる。(1)の「ドライバーで突き破る」のデは<手段>を表わしているため、後ろの複合動詞「突き破る」は『手段』構造だと言えるのである。この「手段のデ」がいつも文に現われるわけではないが、『手段』構造の複合動詞の意味に合わせて挿入することはできる。例えば、(3)の「持ち上げた」の前には「手で」を補うことができるのである。

### 3.2 『原因』構造

(4) 中央の柱から左半分が、ほぼすべて崩れ落ちた。(95.6.30 朝)

(5) でも彼は週末になると喜び勇んで早朝から出かけます。(95.6.20 朝)

(6) 小学校6年生の女の子が焼け死んでしまいました。(95.9.12 CH4 NEWS)

前項要素が後項要素の<原因・理由>になり、後項要素は前項要素による<結果>を表わすと思われる構造で、[前項要素タカラ後項要素]に言い換えられる。他にも「泣き濡れる、転び倒れる」等がある。

動詞の形態からみると、『原因』構造は「自動詞+自動詞」型になっており、前・後項要素共に相対自動詞である場合が多い。これは、『手段』構造が他動詞同士の組み合わせであることとは対照的である。但し、「自動詞+自動詞」型だからといってすべてが『原因』構造になるとは限らない。

他の構造と弁別できる特徴として、この構造の組み合わせの前には<原因>の副詞相当語句「～デ」が来られるということが挙げられる。いつも「原因のデ」が文に現われるわけではないが、複合動詞の意味に合わせて挿入することはできる。例えば、(6)の「焼け死ぬ」の前に火事でも補うこともできるが、この「デ」は<原因>を表わしているため、後ろの焼け死ぬは『原因』構造であることが分かる。

<sup>14</sup>一般に、相対他動詞の表わす<行動・行為>は、その行為の<結果>までも含んでいる。例えば、「突き破る」の場合、「破る」行為は「破れる」結果までを表わしているのである。

### (7) 『様態』構造

この構造の前項要素は、後項要素が行われる際の<状態・様子>を表わしていると思われる。[前項要素タママ後項要素]に言い換えられる。この構造の複合動詞は、要素間の時間関係によってさらに二分される。

#### 3.2.1 『様態-同時』構造

- (8) 鉄筋や非常階段が垂れ下がっている。(95.6.30 朝)
- (9) この町の一角に隠れ住んだアンネの (95.8.26 テレビ放送)
- (10) 約四十五分かけて仕上げた「自然の森」を持ち帰った。(95.5.28 朝)

前・後項動詞の行われる時間帯が同じでありながら、前項動詞が後項動詞の<様態>を表わしていると思われる構造である。この構造の前項要素には、瞬間・状態動詞が立ちやすい。他に、「生き別れる、持ち運ぶ」等がある。

#### 3.2.2 『様態-継起』構造

- (11) 「シンガポールは西側メディア、特に米国メディアには屈服しない」などと、欧米メディアを切り捨てた。(95.6.24 朝)
- (12) トーティアはこねた粉をクレープのように丸く薄く伸ばし焼いたもので、普通はその中に肉や野菜とともにトマトじたての辛味ソースを入れ、巻いて食べるものです。(95.6.25 朝)
- (13) 坂本さんを殺し埋めたことが、(95.8.30 CH10 NEWS)

前項要素が後項要素より先に行われて、さらに前項要素が後項要素の<様態>を表わしていると思われる構造である。この構造の前項要素には継続動詞が立ちやすい。但し、この組み合わせには<継起>の意味が加わっているため、ここでの継続動詞は動作の進行中でなく、動作の終わった結果の状態を表わしている。他に「破り捨てる」等がある。この組み合わせには、複合体を成さない「動詞の連用形、動詞」との線引きが難しい例が多い。

### 3.3 『同時』構造

- (14) 二人目の子も障害児と知って、私はショックで泣き明かした。(95.6.30 朝)
- (15) 山から山へと逃げ歩きました。(映画「ビルマ壱撃」)
- (16) 情景を思い描きながら文章にすること。(95.6.6 朝)

前項要素と後項要素の行われる時間帯が全く同じであることだけに注目する構造で、[前項要素ナガラ後項要素]に言い換えられる。他にも「売り歩く、遊び暮らす」等がある。前項要素に継続動詞が来るが、この組み合わせでの継続動詞は一般の継続動詞の特徴通り、動作が進行中であることを表わす。これは、3.3.2『様態一継起』構造での継続動詞の役割とは異なる点である。

### 3.4 『継起』構造

- (17) 自分で描きためた絵を来年のカレンダーにして刷るためだ。(95.6.23 朝)
- (18) 父の生まれ育ったアメリカへ発ちました。(95.9.1 CH4 NEWS「きょうの出来事」)
- (19) 数え切れない展覧会の中でその一つを探し当てるなんて気が遠くなるくらいだ。  
(95.8.29 ドラマ「火曜サスペンス劇場」)

前項要素が後項要素に先行することだけに注目する構造で、[前項要素テカラ後項要素]に言い換えられる。他に「乗り捨てる、移り住む」等があるが、数少ない複合動詞のパターンである。よく使われる幾つかの例以外は、動詞を時間的順序通りに並べた「動詞の連用形、動詞」との区別がはっきりしないものが多い。

### 3.5 『並列』構造

- (20) 勤評、警職法、六〇年安保とデモに明け暮れる学生時代をすごした(95.6.29 朝)
- (21) 明日のことは思い煩うなど、さとされたような気がした。(95.6.23 朝)

前・後項要素間の時間関係は定まっておらず、類義語または反対語同士が結び付いている。[前項要素タリ後項要素タリスル]に言い換えられる。他にも、泣き叫ぶ、輝ききらめく等がある。

### 3.6 『逆転』構造

- (22) ご飯を食べ残す。

<全部前項要素ナラ後項要素ノハズガナイ>の意味構造で、前・後項要素の関係が<逆転・逆接>になっていると思われる構造である。[前項要素ナイデ後項要素]に言い換えられる。他にも、積み残す、売れ残る等がある。

以上で複合動詞を七つの構造に分けてみたが、一つの組み合わせが二つの意味構造を持っている場合もある。例えば書き残すは、

(23) メモは鉛筆で書き残しておいた。

(24) 大事なところをうっかり書き残してしまった。

(22)では『手段』構造、(23)では『逆転』構造になるのである。このような組み合わせの意味関係は文脈に頼るしかない。

また、同じ後項要素を持つからとて必ずしも同じ意味構造になるとも限らない。例えば、「生き別れる」と「泣き別れる」は同じ後項要素を持っているにもかかわらず、「生き別れる」は『様態一同時』構造、「泣き別れる」は『同時』構造になっているのである。

## 4 複合名詞の分類

各構造の特徴と括弧内の事柄は複合動詞と同様である。『手段』構造と『逆転』構造の複合名詞は見当たらない。

### 4.1 『原因』構造

(25) 飢え死にしないものは病気で死ぬ。(95.9.12 CH12 ドキュメント)

「飢え死にする」と「病気で死ぬ」が対比されている中で、「病気で」が原因を表わしていることから、前項要素の「飢え」も原因を表わすことが分かる。飢え死に以外の例は見当たらず、複合名詞としてはまれな組み合わせである。

### 4.2 『様態』構造

#### 4.2.1 『様態一同時』構造

(26) 教団から3億円の持ち逃げを計画していた。(95.9.6 CH6 スペース)

(27) と本屋で立ち読みしてたっけ。(95.9.17 漫画「サザエさん」)

(28) 生き埋めになっているとみられる約三千人の大半が絶望視される、との(95.5.30 朝)

他に、「立ち聞き、持ち腐れ、乗り逃げ」等がある。この構造の複合名詞が動詞として使われる場合は、複合名詞の後ろに「スル」以外にも「ニナル、ダ」等が付く組み合わせが多い。

#### 4.2.2 『様態－継起』構造

- (29) 公園で隠し撮りしてたんだよ。(95.8.29 ドラマ「火曜サスペンス劇場」)
- (30) アジの開きがロースターの中で焼きざましになっている。(95.6.23 朝)
- (31) 女性が轢き逃げで死亡。(95.9.9 CH4 NEWS)

他に「包み焼き、切り売り」等がある。特に、(29)の「焼きざまし」をその形態から見ると『手段』構造のように見えるが、意味から考えるとどうしても『手段』構造にはなれない。この「焼きざまし」はその場限りのものかも知れないが、実際このようなその場限りの複合名詞ないし複合動詞はかなり使われている。このことは、新しい組み合わせがどんどん作られるという、複合体の特徴を示唆していると思われる。

#### 4.3 『同時』構造

- (32) 会社の若い人たちに渡して、みんなで回し読みしている。(95.5.28 朝)
- (33) 隣の家を覗き見するヤツは、(95.8.31 CH3 映画「アルフ」)

他に、回し飲み、泣き寝入り、恨み死に等があり、継続性を帯びた動詞が前項要素になる。

#### 4.4 『継起』構造

- (34) 夏は藻の成長を妨げる草の刈り干しと焼却。(95.6.25 朝)

他に「乗り逃げ」があるが、「乗り逃げ」には二つの意味があつて、<奪った車に乗ったまま逃げる>の意味なら『様態－同時』構造に、<降りて運賃を払わずに逃げる>の意味なら『継起』構造になる。

#### 4.5 『並列』構造

- (35) 黒い頭が三つ四つ岸壁のすぐ近くで浮き沈みしているのが見えた。(95.5.14 朝)
- (36) 三代目には人の生き死にも分かるつつゆうのかい?(95.9.7 CH4 ドラマ「静かなるドン」)
- (37) 中央から来た国の公務員を地方の公務員が税金で豪勢に飲み食いさせ、(95.5.14 朝)

他に「読み書き、好き嫌い、見え隠れ」等があり、複合名詞の大多数を占めている。他の構造の複合名詞と異なり、『並列』構造の後項要素には連濁が起こらないが、これは前・後項要素の意味関係が対等であることの印であろう。



## 5 複合動詞と複合名詞の比較

複合動詞と複合名詞を比べて、複合動詞の構造上の特徴をまとめてみる。

- ◎複合動詞には『手段』構造が、複合名詞には『並列』構造が目立って多い。
- ◎複合名詞の大多数を占める『並列』構造が複合動詞においては周辺の構造に過ぎない反面、複合動詞の大多数を占める『手段』構造は複合名詞では見当たらない。また、複合名詞には『逆転』構造も存在しない。
- ◎『原因』構造の複合名詞は一二例ぐらいしかない。
- ◎複合動詞にも複合名詞にも『様態』構造の組み合わせはかなり存在する。
- ◎数はそれほど多くないが、『同時』構造も複合動詞と複合名詞両方に存在する。
- ◎複合動詞、複合名詞共に『継起』構造の組み合わせは少ない。

複合動詞と複合名詞は、表わそうとする意味構造によって使い分けられているように思われる。『手段』構造では、後項要素である相対他動詞が動作はもちろん動作の結果まで表わせるため、動詞として有利であろう。また、並列関係を表わすには「動詞の連用形+動詞」よりも「動詞の連用形+動詞の連用形」、つまり複合名詞の方が、前・後項要素が対等に見えてずっと都合がよからう。

一方、二つの動詞が結び付いて一まとまりの意味内容を表わす複合体に、時間の推移だけに注目する構造が少ないのは当然の結果と思われる。

## 6 おわりに

以上で複合動詞の構造上の特徴を、複合名詞と比べながら調べてみた。

「絶対他動詞+相対他動詞」から成る『手段』構造や、後項要素が「～残る/残す」から成る『逆転』構造、「(相対)自動詞+(相対)自動詞」から成る『原因』構造は複合動詞になりやすいことが分かった。「手段のデ」や、「原因のデ」で修飾、意味の限定のできる組み合わせは複合動詞になりやすいといってよからう。しかし、反対語や類義語同士の結び付きである『並列』構造は、複合動詞の構造にはなりにくい。

『様態』構造、『同時』構造の組み合わせは、複合動詞と複合名詞両方にかなり存在していて、複合動詞の特徴を調べるにはあまり役立たない。これらの二つの構造の組み合わせは、複合動詞になる構造の組み合わせや複合名詞になりやすい構造の組み合わせとそれぞれ比べて見る必要があると思われる。

複合動詞の構造を複合名詞と関連付けて調べてみると、複合動詞と複合名詞の境界線ははっきりしない組み合わせも出てくる。一般に、ある組み合わせが複合動詞なら、その名

詞形に「スル」を付けて動詞にすることはできない<sup>15</sup>が、複合動詞の形でも、その名詞形に「スル」を付けた形でも、動詞の役割が果たせる組み合わせが存在するのである。「狙い撃つ、狙い撃ちする／立ち枯れる、立ち枯れする」<sup>16</sup>等がその例である。ところが、これらの受け身はそれぞれ「狙い撃ちサレル／立ち枯れニナル」であって、「\*狙い撃たれる／\*立ち枯れられる、\*立ち枯れサレル」にはならない。複合名詞と関連付けて複合動詞の構造上の特徴を調べる際、このような用法が可能な組み合わせには他に何があるのか、なぜこのような用法が可能になるのか等の疑問が生じるが、これらの疑問点についての考察は今後の課題にしたい。

### 参 考 文 献

- 安 善柱 (1994) 「複合動詞の構造分析—前・後項動詞とも単独用法での意味・機能を保っている組み合わせを中心に—」筑波大学 文芸・言語研究科 平成6年度修士論文
- 石井正彦 (1983) 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』2-8 明治書院
- 石井正彦 (1984) 「複合動詞の成立—V+Vタイプの複合名詞との比較—」『日本語学』3-11 明治書院
- 嶋田裕司 (1989) 「日本語の複合動詞と複合名詞の意味的相違」『横浜市立大学論叢』人文科学系列 40-3

<sup>15</sup> 「洗い落とし、生き残り」等の転成名詞に「スル」を付けて、「\*洗い落としする、\*生き残りする」のようには使えない。

<sup>16</sup> 文の中では「立ち枯れている、立ち枯れしている」のように使われている。

## A Study on the Structural Analysis of Compound Verbs

Sounju Ahn

This study focuses on the combination of two component verbs which defines a single meaning and functions in an independent usage.

The different combinations consisting of two verbs may be in the verb form or in the nounform. In this paper, the structural characteristics of compound verbs were examined by making a comparison between compound verbs and compound nouns.

After a thorough analysis, the compound verbs and compound nouns can be classified into several types based on the related meanings of the two verbs which composed the combination. Compound verbs are classified into 7 structural types as in the following : *SYUDAN*, *GENIN*, *YOUTAI*, *DOUJI*, *KEIZOKU*, *GYAKUSETSU* and *HEIRETSU* ; and compound nouns are classified into 5 structural types such as : *GENIN*, *YOUTAI*, *DOUJI*, *KEIZOKU* and *HEIRETSU*. For the compound nouns, only the *GENIN* type has one or two examples.

From this study, it can be said that *SYUDAN*, *GENIN* and *GYAKUSETSU* types can be compound verbs. In the *HEIRETSU* type, there are more examples of compound nouns than compound verbs.